

国際会議報告

「ウィルシャー教授の会議」

に出席して

北 村 隆 行**

1990年4月1日から6日まで英国ウェールズのスウォンジー市で開催された Fourth International Conference on Creep Fracture of Engineering Materials and Structures に参加する機会を得た。会議は、スウォンジー市街からバスで約20分程度の小高い丘にある小さなお城(写真1参照)で行われた。はるかに海が見渡せるお城はスウォンジー大学所有であり、その周辺に学生寮や会議ができる建物がある。会議期間中、参加者は春休みで空になった寮に宿泊し、お城の食堂で一緒に三食をとにした。このため、会議場以外でも参加者と接する機会が多く、意見交換や情報交換、研究以外の私的交流に至るまで参加者間のコミュニケーションは活発であった。

本国際会議は、1981年、1984年、1987年に続く4回目のものであり、過去いずれも地元スウォンジー大学の WILSHIRE 教授を中心として同地で開催されてきた。今回も同氏の活躍は目を見張るばかりであり、初日にバスで到着する参加者ひとりひとりを宿舍入口で出迎え、最終日に全員の出発を見送るといった徹底ぶりであった。また、会議全体を取り仕切ると同時に夕食時や晩餐会で司会までも自身で行い、“WILSHIRE 教授の会議”との印象を抱くほどであった。

講演数は100件近くにのぼり、出席者もヨーロッパ

表1 会議のセッション一覧

Mechanism of creep
Creep fracture processes
Intermetallic materials
Nickel-base superalloys
Creep and fracture of ceramics
Creep and fracture of steels
Creep and fracture of welds
Creep crack growth
Creep fatigue interactions
Effects of multiaxial loading
Creep life prediction
Plant assessment

各国、アメリカ、日本を中心として世界各地から約130名を数えた。そのうち、日本からは約15名の参加者があった。本会議のテーマはクリープであり、これに関して表1に示すようなさまざまなセッションが設けられた。当初の予定では一室のみで講演が行われるはずであったが、講演希望者が多かったため第2日目のみは二室を使用してパラレル・セッションとなった。クリープのメカニズムからクリープき裂伝ばの力学まで領域は広く、多彩な分野の研究発表があった。また、材料に関しても鉄鋼から金属間化合物やセラミックスまで含み、本分野の研究に対する学際的な取組みの必要性を改めて感じた。参加者も機械屋、金属屋等多方面にわたり、いろいろな角度からの講演・討議が行われ、ユニークな会議であった。さらに、各講演に対する討論も活発で、そのやりとりも楽しいものであった。専門分野の関係から、特にクリープき裂伝ばやクリープ疲労のセッションに注目していたが、実験研究については日本の発表が他国より質・量とも優れているように思われた。解析的研究を過小評価するのではないが、実際の現象を把握するためには実験観察が不可欠であり、この分野では日本の研究は優位に立っているように思われる。今後も努力を積み重ねてゆきたいものである。

スウォンジー市主催の晩餐会および本会議の晩餐会ともウェールズ伝統の男声合唱があり、楽しい夕べであった。スウォンジー市内では街角の表示にウェールズ語が見受けられたり、夕食中の会話の端々に、“イングランドでは……”とか、“ウェールズでは……”のような表現が現れ、一地方かつ一国とあらかじめ聞いてはいたものの少し面食らうことがあった。ちなみに、詠うように抑揚をつけた WILSHIRE 教授の話し方は、典型的なウェールズ・スタイルである、と晩餐会で同席した イングランド人 が教えてくれた。

会議自体は盛況であったが、宿泊設備は劣悪であったと言わねばならない。我々の宿舍は1フロアに約10室程度あったが、共用のトイレが2、シャワー・バスが各1のみであり、かなり不便を感じた。1cm程度もすきまのある窓やベッド等も粗末と言うしかなかった。たしかに会議期間中の宿泊費が安価であったのはありがたかったし、会議場のすぐ近くに宿泊できるのも便利であったが、(たとえ学生寮でも)もう少し居住性に考慮

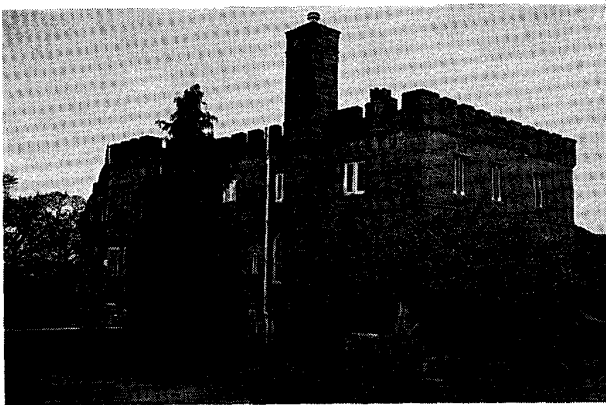


写真1 Clyne Castle

* 本国際会議出席にあたっては、日本鉄鋼協会日の方育
学術振興交付金が賦与されました。

** 京都大学工学部 工博

してはしかった。同所を去る時に、見送ってくれた WILSHIRE 教授に次回（第 5 回）会議の開催について尋ねたところ、意欲十分の答えが返ってきた。教授のあまりの自信と開催の労を思い浮かべ、つい宿泊設備についての不満を言いそびれてしまった。やはり、一言、示唆

すべきであつたらうか？

最後に、本会議出席に際して日本鉄鋼協会から第 13 回日向方斉学術振興交付金をいただいたことを付記する。